

年間継続事業としての不登校キャンプの効果 第2報

——ソーシャルスキルと生きる力からの検討——

築山 泰典¹⁾ 藤井 雅人¹⁾ 中嶋 優友²⁾ 田中 忠道¹⁾

The Effects of continual camp during a year for students of Non-attendance at school II

—— Examination from transformation of Social Skill
and IKIRU CHIKARA(Zest of Living) ——

Yasunori TSUKIYAMA¹⁾ Masato FUJII¹⁾ Yusuke NAKASHIMA²⁾ Tadamichi TANAKA¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the effects of camp during a year for students of Non-attendance at school. Actually, to the campers who participated in the camp causes of 23 students, the change of 6 times camps was measured by using 2 standards(①social- skills scale ②IKIRU CHIKARA scale).

The following results were obtained:

- 1) In the comparison of each event, the social skill was a result that uptrends is shown by piling up times.
- 2) “Ability to hear and Talk” that was a part of “Communications” showed the result of a decrease.
- 3) Uptrend was shown overall for camper’s social skill by the staff estimates.
- 4) In the comparison of each event, the IKIRU CHIKARA was a result that uptrends is shown by piling up times.

The results suggested that effectiveness of the continuous participation in the camp was shown.

1. 緒言

文部科学省によると、不登校傾向にある児童・生徒を対象としたキャンプなどの支援事業は、平成17年度に29都道府県64事業であったものが、平成19年度には35都道府県83事業と、都道府県数で20.7%、事業数で30.0%もの増加を示している¹⁾。

2009年度13年目を迎えた、福岡県立少年自然の家「玄海の家」が主催する不登校者を対象とした本事業は、その継続期間の長さからも、先駆的であり、今日の同様な事業を一般化させるに重要な役割を担ったものと考えられる。また、多くの不登校者を対象とした事業は、年間に一事業実施されることが多いが、より高い教育効果とその定着を目

1) 福岡大学スポーツ科学部
Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science

2) 福岡大学大学院 スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Sports and Science, Fukuoka University

的に年間を通じて複数回継続的に実施されてきた運営形態も一つの特徴であると言える。

過去2年間、筆者は年間継続事業としての本事業の特性及び有効性を検証するために、2007年度には各回最終プログラムとして実施される“スピーチ大会”における参加者の発言に関して時間と文字数、そしてその内容からの検証を行った²⁾。また、2008年度は事業参加前後の家庭における時間の過ごし方に焦点を置き検証を行った³⁾。これら、検証にて年間継続事業としての本事業の有効性を示してきた。また、2008年度はそのまとめとして、具体的にソーシャルスキル育成に向けた、社会技能訓練のプログラム導入の必要性を提言するに至った。

1996年、中央教育審議会は第一次答申として「生きる力」の育成方策の一つとして、青少年の生活体験・自然体験の機会増加を求めた。また、2008年の学習指導要領改訂により、ゆとり教育の見直しは実施されたが、生きる力の育成はより強化されたものとなった。また、この具体的育成手法として「自然体験活動の推進」が示され、長期自然体験活動推進プランが実施されている状況にある。

この様な、背景によって2001年橘らにより作成された「IKR (IKiRu chikara) 評定用紙」は、児童・生徒におけるキャンプの教育的効果を測定する尺度として開発され⁵⁾、今日ではより簡便に用いることができる、短縮版の“IKR簡易版”が用いられることが多くなった。

そこで本研究では、一般的キャンプ効果測定手法である“IKR短縮版”と、前年度提言を行った“ソーシャルスキル尺度”を用い、年間継続事業である本事業の評価を行うことを主たる目的とする。尚、本事業の特性を明確にするため、各事業における前後の数値比較ではなく、事業ごとの数値比較を行うことで、年間継続事業形態であることを検証することとする。

2. 対象及び方法

2.1. 対象事業

本研究の対象事業である、「ハートtoハートin YASU&GENKAI '09」は2009年度6回の事業が実施された。第1回の事業である「ファーストキャンプ」は2009年8月5日～6日の一泊二日で海浜レクリエーションを中心に施設泊にて実施された。第2回事業である「マリンキャンプ」は8月18日～21日の三泊四日でマリンスポーツや釣りを中心にテント泊中心に実施された。第1回と第2回と実施日の間隔が短かったことは、今年度の新規参加者を募り易くするための配慮からであった。

続いて第3回の事業「アイランドキャンプ」は9月8日～13日の五泊六日で宗像市大島でのマリンスポーツや塩作りなどの活動を中心に実施され、自炊・テント泊中心の形態であった。第4回事業である「リバーサイドキャンプ」は9月30日～10月4日の四泊五日で、筑紫野市立竜岩自然の家にて、沢登りや登山などの活動が中心に実施され、自炊・バンガロー泊中心の形態であった。

第5回「ハイランズキャンプ」は12月2日～4日、第6回「ファイナルキャンプ」は2010年1月20日～22日の、それぞれ二泊三日で夜須高原青少年自然の家にて、登山や施設内の設備を活用したプログラムを中心に実施され、宿舎泊で行われた。

2.2. 参加者状況

全6回の事業に対し、合計23名（男性15名、女性8名）の参加者を得た（表1.）。これら参加者は、福岡県下の小中学校への募集及び昨年度の参加者へ広報し募ったものである。各回の参加者数は第1回19名、第2回13名、第3回10名、第4回15名、第5回13名、第6回10名の延べ80名の参加者数であった。

本事業の対象年齢は、小学校4年生～中学校3年生までであり、全6回を通じての学年別参加者数は、小学校で4年生1名（女性1名）、6年生2名（女性2名）、中学校で1年生2名（男性2名）、2年生9名（男性6名、女性3名）、そして3年生9名（男性7名、

表1. 対象者の事業参加状況

番号	氏名	性別	学年	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	参加回数
1	A	女性	小4	○	×	×	×	×	×	1
2	B	女性	小6	○	○	○	○	○	×	5
3	C	女性	小6	○	○	○	○	○	○	6
4	D	男性	中1	○	○	○	○	○	○	6
5	E	男性	中1	○	○	×	○	×	×	3
6	F	男性	中2	○	○	×	○	○	○	5
7	G	男性	中2	○	×	×	×	×	×	1
8	H	男性	中2	○	×	×	×	×	×	1
9	I	男性	中2	○	○	○	○	○	○	6
10	J	男性	中2	○	×	○	○	○	○	5
11	K	男性	中2	○	○	×	○	○	○	5
12	L	女性	中2	○	○	○	○	○	○	6
13	M	女性	中2	○	×	×	×	×	×	1
14	N	女性	中2	×	○	×	×	×	×	2
15	O	女性	中3	○	○	○	○	×	×	4
16	P	女性	中3	○	○	○	○	○	×	5
17	Q	男性	中3	○	○	×	×	×	×	2
18	R	男性	中3	○	○	○	○	○	○	6
19	S	男性	中3	○	×	○	○	○	○	5
20	T	男性	中3	○	×	×	×	×	×	1
21	U	男性	中3	×	×	×	○	○	○	3
22	V	男性	中3	×	×	×	○	×	×	1
23	W	男性	中3	×	×	×	×	○	×	1

女性2名)であった。

6回を通じての参加回数は、1回のみが8名、2回が1名、3回が2名、4回が1名、5回が6名、そして6回が5名であった。本事業の特性を検証するために、これら参加者のうち本事業に複数回参加した者を対象とした分析も用い、その者にとって“初参加の事業”と、“最終参加の事業”との数値を比較することとする。

2.3. 検査及び手続き

2.3.1. ソーシャルスキル尺度

参加者のソーシャルスキルの変容を測定するために、上野らが作成した48項目からなるソーシャルスキル尺度を用いた⁶⁾。この尺度は、各項目に対して「0点：いつもできない」から「3点：いつもできる」の4段階で評価させる4件法を用いたものであり、対人マナー（6項目）、状況理解（5項目）、セルフコントロール（4項目）、課題遂行（5項目）から「集団行動」を、仲間関係の開始（3項目）、仲間関係の維持（6項目）、仲間への援助（3項目）から「仲間関係スキル」を、聞く・話す

（2項目）、非言語スキル（3項目）、アサーション（8項目）、話し合い（3項目）から「コミュニケーションスキル」をそれぞれ測定するものである

☆ハートtoハート in YASU&GENKAI '09 アンケート用紙☆(本人用)

番号	内容	1	2	3	4
1	場面にあった言葉づかいをする(敬語やくだけた言葉の使い分けなど)	1	2	3	4
2	相手の話をきき終えること(聞く)	1	2	3	4
3	異性の人となれなれしんだり、つきまったりしない	1	2	3	4
4	今どうすればいいのかを場の様子から感じる	1	2	3	4
5	いやなことははっきりとわかる	1	2	3	4
6	外出や遊びなど、友だちと計画を立てて実行する	1	2	3	4
7	顔を見て、人と話すことができる	1	2	3	4
8	かたよった友だちづき合いをしない	1	2	3	4
9	決まった意見に同意する	1	2	3	4
10	くやしきや怒りを言葉で伝える	1	2	3	4
11	行動する前にじっくり考える	1	2	3	4
12	困ったとき、人に助けを求める	1	2	3	4
13	こまっている友だちを助ける	1	2	3	4
14	時間を守る	1	2	3	4
15	仕事や課題に取り組みるとき、計画を立て、それにそって実行する	1	2	3	4
16	知っている人に自分から挨拶をする	1	2	3	4
17	失敗や予定外のことが起こってもあわてず、その場に応じて取り組む	1	2	3	4
18	自分がなにか困っているときに、友だちに相談する	1	2	3	4
19	自分が悪いときに自ら進んであやまる	1	2	3	4
20	自分の気持ちを素直に表し、意見をはっきり言う	1	2	3	4
21	自分の仕事は最後まで投げ出さない	1	2	3	4
22	自分のした行動を振り返る	1	2	3	4
23	冗談や皮肉など裏の意味のある言葉を理解する	1	2	3	4

資料1. ソーシャルスキル尺度(表)

	1	2	3	4
24 先生や話している人の方を向いて話を聞く	1	2	3	4
25 タイミングよく、うなずき・あいづちを入れる	1	2	3	4
26 誰にでも話しかけることができる	1	2	3	4
27 ちょうどよい声の大きさを話す	1	2	3	4
28 途中で友だちとの話をやめたりしない	1	2	3	4
29 友だちが失敗したり、落ち込んだりしているときは、はげましてなぐさめる	1	2	3	4
30 友だちと協力しながら仕事や、課題を行う	1	2	3	4
31 友だちと趣味や興味のあることを話したりやったりする	1	2	3	4
32 友だちと冗談を言い合う	1	2	3	4
33 友だちとの約束を守る	1	2	3	4
34 友だちのなやみや不安を共感しながら聞く	1	2	3	4
35 友だちの秘密を守ったり自分の秘密を教えたりできる	1	2	3	4
36 友だちの表情や様子から、友達の気持ちを考える	1	2	3	4
37 友だちを遊びに誘う	1	2	3	4
38 話し合いの際、決め方や他の方法を提案する	1	2	3	4
39 話し合いの内容にあった発言をする	1	2	3	4
40 人に感謝の気持ちを伝える	1	2	3	4
41 人の気持ちを考えながら行動する	1	2	3	4
42 他の子におされたり、たたかわれたりした時に、おこたたりせずに理由を聞く	1	2	3	4
43 身だしなみや身の回りの物の整理整頓ができる(髪型や服装を整える)	1	2	3	4
44 身振りや手振りをうまく使って話す	1	2	3	4
45 みんなでする仕事で自分の仕事は責任もってやる	1	2	3	4
46 みんなに向かって自分の考えを述べる	1	2	3	4
47 やるべきことを、気をそらさないで最後まで取り組む	1	2	3	4
48 分からないことは質問する	1	2	3	4

資料1. ソーシャルスキル尺度(裏)

(資料1.)

また、この尺度に関しては、学校教育現場における検証では、本人のみの評価だけでなく、担任の評価も検証に用いているため、本研究においても、グループと直接的に関わるボランティアスタッフの評価も用いることとする。

2.3.2. IKR簡易版

参加者の生きる力の変容を測定するために、橋らが作成した「IKR (IKiRu chikara) 評定用紙」を参考に作成された「IKR簡易版」(以下IKRと略す)を用いた⁷⁾。本尺度は「1点:まったくあてはまらない~6点:とてもよくあてはまる」までの6段階で評価させる6件法を用いたものであり、非依存(2項目)、積極性(2項目)、明朗性(2項目)、交友・協調(2項目)、現実肯定(2項目)、視野・判断(2項目)、適応行動(2項目)から「心理的社会的能力」を、自己規制(2項目)、自然への関心(2項目)、まじめ勤勉(2項目)、思

平成 年 月 日()

少年期(中学生以下)

アンケート(回目)

名前 _____ (姓 ・ 名) 性別() 歳 _____

学年(小学 ・ 中学 ・ 高校 ・ 高1 ・ 高2 ・ 高3 ・ 大学) _____

・下のそれぞれの質問(しつもん)について、自分にあてはまるかどうか、「とてもよ(あ)てはまる」から「まったくあ(ま)りあ(ま)らない」までの、6段階(びんごう)で答えてください。

・自分が、もっとあてはまると思うところに、例(れい)のりめ(り)のように印をつけてください。

・質問(もん)が答えられなくなることがあります。あまり考えすぎずすぐにボタンを押してください。

学校の成績(せい)などは、まった(ま)った(た)い(た)い(い)は(は)あ(あ)げ(げ)ず(ず)、ハート(はーと)ボタン(ぼたん)を(を)こ(こ)の(の)紙(かみ)に(に)貼(貼)り(り)て(て)ください。

ハートボタンには質問の順番(じゅんばん)が(が)あ(あ)って(て)います(います)。

1 2 3 4 5 6

とてもよくあてはまる ほとんどあてはまらない

人との約束が守れる

1. いやなことは、いやとはっきり告げる 1 2 3 4 5 6

2. 人のために何(なに)か(か)をしてあげるのが好きだ 1 2 3 4 5 6

3. 先を見過して、自分で計画(けい画)が立てられる 1 2 3 4 5 6

4. 暑(あつ)さ(さ)や寒(ひや)さに、まげない 1 2 3 4 5 6

5. だれにでも話(はな)しかけることができる 1 2 3 4 5 6

6. 花(はな)や風景(けいざい)などの美しいものに、感動(かんどう)できる 1 2 3 4 5 6

7. 多くの人に好(こ)われている 1 2 3 4 5 6

8. 人の話(はな)しをきちんと聞くことができる 1 2 3 4 5 6

9. 自分(自分)のことが大好き(だいすき)である 1 2 3 4 5 6

10. ナイフ・包(たぶ)丁(てい)などの刃物(やいば)を、上手(うま)に使(つか)える 1 2 3 4 5 6

うらへつてくー

資料2. IKR簡易版(表)

1 2 3 4 5 6

とてもよくあてはまる ほとんどあてはまらない

11. 自分からすすんで何(なに)でもやる 1 2 3 4 5 6

12. いやがらずに、よく働く 1 2 3 4 5 6

13. 早起(はやく)起き(きる)である 1 2 3 4 5 6

14. 自分勝手(ご勝手)な、わがまま(わがまま)を言(い)わない 1 2 3 4 5 6

15. 小さな失敗(しっぱい)をおそれない 1 2 3 4 5 6

16. 人の心の話(はな)がわかる 1 2 3 4 5 6

17. 自分で問題(もんだい)点(てん)や課題(かがい)を見つけ(み)つけることができる 1 2 3 4 5 6

18. とても痛いケガ(けが)をしても、がまんできる 1 2 3 4 5 6

19. 失敗(しっぱい)しても、立ち直(た)る(ち)る(ち)る)のが早い 1 2 3 4 5 6

20. 季節(きせつ)の気化(きか)を感(かん)じる(する)ことができる 1 2 3 4 5 6

21. だれでもと仲(な)よくできる 1 2 3 4 5 6

22. その場(ば)にふさわ(さわ)しい行(こう)動(どう)ができる 1 2 3 4 5 6

23. だれにでも、あいさ(あいさ)つ(つ)ができる 1 2 3 4 5 6

24. 洗濯機(せんたくき)がなくても、手(て)で洗(あら)う(う)ことができる 1 2 3 4 5 6

25. 親(おや)に、物事(ものごと)を考(かん)えられる 1 2 3 4 5 6

26. 自分(自分)に割(わり)当て(あ)てられた仕事(しごと)は、しっか(しっか)り(り)とやる 1 2 3 4 5 6

27. からだが動(うご)かし(し)ても、疲(つか)れ(れ)にくい 1 2 3 4 5 6

28. お金(おかね)やモノ(もの)のわ(わ)だ(だ)使(つか)い(い)をしない 1 2 3 4 5 6

アンケートはこれで終わりです。ありがとうございました。

資料2. IKR簡易版(裏)

いやり(2項目)から「徳育的能力」を、日常的行動(2項目)、身体的耐性(2項目)、野外技術・生活(2項目)から「身体的能力」をそれぞれ測定するものである(資料2.)。

2.3.3. 検査の手続き

ソーシャルスキルに関しては第1回事業から第6回まで全事業最後の夜のグループミーティングにて、上記質問紙を参加者とその担当ボランティアに回答させた。IKRに関しては、第1、4、5、6回

の事業最終夜に回答させた。

2.3.4. 統計処理

ソーシャルスキルと得られたデータに関して、各事業の比較では一元配置の分散分析の後 Scheffeの方法を用い個別の比較を行った。また、各個人の最初と最後の比較においては、平均値の差の検定 (t検定) を用いた。

尚、この分析にはシミック株式会社のHAL-BAU (High quality Analysis Libraries for Business and Academic Users) 7を用いた。この時統計的有意水準は、5%を用いるが、10%を有意傾向と解釈することとした。

3. 結果及び考察

3.1. ソーシャルスキル

第1回から6回までの全参加者のソーシャルスキル項目別に、各回の平均値と標準偏差を示した (表2.)。一元配置の分散分析を用い、その値の変化に関して検定を実施したが、有意な差は認められなかった。しかし、Scheffeの方法による個別

回の比較において、“コミュニケーションスキル”における「聞く・話す」の項目に関して、「5.52 (1回目) と4.67 (5回目)」との間に有意な下降傾向が示された ($p<.1$)。

このことは、第5回目のプログラム内容が、登山を中心とした困難克服体験であり、参加者同士の討議場面が少なかったことの影響があるものと考えられる。

全体を通じて、自己評価によるソーシャルスキルの上昇を期待したが、数値としてその期待に沿う結果は示されなかった。不登校児・者を捉える際、彼らの自己肯定感の低さがその特徴として示されることが多い^{8) 9)}。肯定的な自己の変容を捉える際、安定した自己肯定感が影響することと考えられ、この手法における事業の有効性を示す結果に至らなかったものと考えられる。

続いて、同様に参加者に直接的に関わったボランティアスタッフの参加者に対する結果を、各回の平均値と標準偏差により示した (表3.)。

この結果からも、一元配置の分散分析にて、有意な差は認められなかった。しかし、Scheffeの方法による個別回の比較において、“集団行動”

表2. ソーシャルスキル尺度事業別得点変化(参加者)

分類	項目	項目数 (N)	第1回 M/(SD)	第2回 M/(SD)	第3回 M/(SD)	第4回 M/(SD)	第5回 M/(SD)	第6回 M/(SD)	F値 P	個別比較
集団行動	対人マナー	6 (74)	16.53 (3.15)	17.38 (3.91)	16.10 (2.70)	17.81 (1.71)	17.34 (2.74)	17.73 (2.56)	0.62 n.s.	n.s.
	状況理解	5 (77)	14.58 (2.48)	14.69 (3.03)	14.10 (2.43)	13.62 (2.49)	13.36 (2.53)	14.82 (1.95)	0.65 n.s.	n.s.
	セルフコントロール	4 (76)	9.72 (1.94)	10.00 (2.77)	10.75 (2.07)	9.89 (2.00)	9.27 (1.66)	10.82 (2.37)	0.80 n.s.	n.s.
	課題遂行	4 (75)	11.12 (1.60)	10.92 (2.46)	11.05 (2.24)	10.35 (2.16)	10.55 (2.43)	11.73 (2.09)	0.55 n.s.	n.s.
仲間関係スキル	仲間関係の開始	3 (76)	8.39 (2.03)	8.23 (1.48)	9.00 (1.61)	8.58 (1.98)	8.00 (1.86)	8.36 (0.98)	0.38 n.s.	n.s.
	仲間関係の維持	6 (76)	16.90 (2.59)	17.73 (3.11)	16.75 (3.03)	18.38 (2.58)	17.46 (2.39)	17.82 (1.80)	0.63 n.s.	n.s.
	仲間への援助	4 (77)	11.00 (1.59)	11.27 (2.34)	11.15 (2.15)	11.00 (1.84)	11.36 (1.72)	11.91 (1.44)	0.38 n.s.	n.s.
コミュニケーション	聞く・話す	2 (79)	5.52 (0.88)	5.31 (1.26)	5.30 (1.01)	5.04 (1.04)	4.67 (1.11)	5.18 (1.34)	0.75 n.s.	1回-5回†
	非言語的スキル	3 (74)	7.74 (1.48)	7.96 (2.03)	7.83 (1.20)	8.08 (1.59)	7.80 (1.17)	8.09 (1.44)	0.12 n.s.	n.s.
	アサーション	8 (76)	20.68 (3.15)	21.67 (5.25)	20.95 (3.69)	21.46 (3.69)	21.09 (4.01)	22.09 (3.80)	0.24 n.s.	n.s.
	話し合い	3 (74)	8.47 (1.43)	8.50 (1.89)	8.39 (2.13)	8.19 (1.58)	7.80 (1.25)	9.09 (1.24)	0.70 n.s.	n.s.

† $P<.1$

表3. ソーシャルスキル尺度事業別得点変化(スタッフ)

分類	項目	項目数 (N)	第1回 M/(SD)	第2回 M/(SD)	第3回 M/(SD)	第4回 M/(SD)	第5回 M/(SD)	第6回 M/(SD)	F値 P	個別比較
集団行動	対人マナー	6 (75)	18.92 (2.94)	19.46 (2.59)	18.73 (2.60)	20.14 (1.96)	19.91 (1.83)	20.58 (2.40)	0.99 n.s.	3回-6回†
	状況理解	5 (62)	15.13 (3.44)	14.44 (1.89)	15.70 (1.62)	16.08 (2.76)	15.60 (2.25)	15.50 (2.14)	0.50 n.s.	n.s.
	セルフコントロール	4 (44)	13.50 (0.50)	11.40 (2.42)	10.88 (2.20)	12.27 (2.14)	11.50 (2.87)	12.17 (1.34)	0.72 n.s.	n.s.
	課題遂行	4 (68)	14.08 (1.80)	12.78 (1.87)	12.91 (1.78)	13.21 (1.90)	13.50 (2.69)	12.92 (1.85)	0.63 n.s.	n.s.
仲間関係スキル	仲間関係の開始	3 (69)	9.14 (1.96)	8.92 (1.32)	9.44 (1.64)	9.62 (1.64)	9.78 (1.55)	10.08 (1.61)	0.73 n.s.	n.s.
	仲間関係の維持	6 (47)	19.80 (2.40)	17.40 (2.87)	18.57 (4.00)	19.67 (2.87)	19.00 (4.16)	20.75 (1.69)	0.96 n.s.	2回-6回†
	仲間への援助	4 (51)	10.40 (1.96)	11.20 (2.79)	11.56 (2.71)	12.85 (2.88)	11.57 (3.02)	12.58 (1.98)	0.85 n.s.	1回-4回†
コミュニケーションスキル	聞く・話す	2 (76)	6.47 (1.20)	6.08 (1.21)	6.36 (0.77)	6.14 (1.23)	7.23 (1.05)	6.92 (0.64)	1.14 n.s.	2回-6回† 4回-6回†
	非言語的スキル	3 (72)	8.79 (2.21)	9.08 (1.89)	8.73 (1.60)	9.39 (1.78)	9.80 (1.60)	9.50 (1.61)	0.57 n.s.	n.s.
	アサーション	8 (65)	23.89 (4.20)	23.73 (5.14)	23.64 (2.87)	25.46 (2.68)	25.00 (3.33)	25.25 (3.44)	0.53 n.s.	n.s.
	話し合い	3 (72)	9.17 (1.77)	9.39 (1.44)	9.27 (1.05)	9.50 (1.84)	10.50 (1.36)	10.58 (1.19)	1.90 n.s.	1回-5回,6回* 2回-5回,6回† 3回-5回†,3回-6回*,4回-6回†

*:P<.05,†:P<.1

における「対人マナー」の項目に関して、「18.73 (3回目)と20.58 (5回目)」の間に有意な上昇傾向が示された (p<.1)。また、「仲間関係スキル」における「仲間関係の維持」の項目に関して、「17.40 (2回目)と20.75 (6回目)」の間、「仲間関係への援助」の項目で「10.40 (4回目)と12.85 (6回目)」との間に有意な上昇傾向が示された (p<.1)。そして、「コミュニケーションスキル」においては、「聞く・話す」の項目において、「6.08 (2回目)と6.92 (6回目)」の間、「6.14 (4回目)と6.92 (6回目)」との間に有意な上昇傾向が示され (p<.1)、「話し合い」の項目に関しては、「9.39 (2回目)と10.50 (5回目)」、10.58 (6回目)、「9.27 (3回目)と10.50 (5回目)」、「9.50 (4回目)と10.58 (6回目)」との間に、有意な上昇傾向が (p<.1)、「9.17 (1回目)と10.50 (5回目)」、10.58 (6回目)、「9.27 (3回目)と10.58 (6回目)」との間に有意な上昇が認められた (p<.05)。

このことは、他の回と比べ、5回目と6回目におけるボランティアスタッフの感じた参加者の話し合いスキルの上昇が示されるものである。前述した、自己評価においてはこの傾向は示されなかったが、参加者は活動場面におけるこの機能を評価

しがちである一方で、スタッフは日常生活や夜の班別ミーティングの参加者の様子も捉えた影響ではないかと考える。

ここまで、事業全体を把握するために、事業ごとの比較検討を行ってきたが、各参加者にとって“継続的に事業に参加することの効果”をより明確に示すためには、その対象者にとって、“最初の事業参加時 (First) と、最後の事業参加時 (Final)”の数値を比較検討することが、必要なもの考える。複数回本事業に参加している者のみが対象となるため、必然的に対象となる参加者は、年間を通じて複数回参加した者に限定されるため、標本数は最大14名と減少するが、その時の項目ごとに平均値と標準偏差を示し、平均値の差の検定 (t検定) を実施した結果を示す (表4.)。

この時、項目ごとの数値としては、上昇傾向が示されるものの有意な上昇は認められない結果であった。唯一、「話す・聞く」の項目においては、下降傾向を示しており、これは前述した参加者の事業ごとの比較においても示された結果と合致する。各回の活動プログラム特性の影響も十分考えられ、事業後半に困難克服を目的としたある種の「自己内葛藤」を意図したプログラム構成であっ

表4. ソーシャルスキル尺度参加者にとっての“最初と最後”の比較

分類	項目	項目数 (N)	First M/(SD)	Final M/(SD)	t値 p
集団 行動	対人マナー	6 12/14	15.92 (3.12)	17.57 (2.59)	t=1.48 n.s.
	状況理解	5 14/14	13.64 2.68	14.50 2.21	t=0.92 n.s.
	セルフコントロール	4 14/14	9.07 (1.90)	10.64 (2.34)	t=1.95 p<.1
	課題遂行	4 13/13	10.85 (1.68)	11.46 (2.26)	t=0.79 n.s.
仲間 関係 スキル	仲間関係の開始	3 13/14	8.00 (2.31)	8.36 (1.01)	t=0.53 n.s.
	仲間関係の維持	6 14/14	16.79 (2.97)	17.86 (2.28)	t=1.07 n.s.
	仲間への援助	4 14/14	10.64 (1.91)	11.71 (1.54)	t=1.64 n.s.
コミュ ニケ ルシ ョン	聞く・話す	2 14/14	5.21 (0.98)	5.07 (1.39)	t=0.32 n.s.
	非言語的スキル	3 14/14	7.79 (1.12)	8.14 (1.56)	t=0.70 n.s.
	アサーション	8 14/14	21.00 (3.16)	22.00 (3.84)	t=0.75 n.s.
	話し合い	3 14/14	8.29 (1.54)	9.00 (1.30)	t=1.33 n.s.

たことが、要因として挙げられる。本来ならば、困難克服を参加者同士のグループ単位で達成させることを意図された内容であったものの、個人単位での克服体験になってしまった可能性を示唆するものと考ええる。

2009年度の本事業の参加者の多くは、中学生(87.0%)である。平成20年度の文部科学省学校基本調査によると年度を越えて不登校である生徒の割合は52.1%であるとされる¹⁰⁾。実際、参加申し込み時のヒアリング調査でも、不登校傾向開始時期が小学校期からとの回答が多い傾向も認められている。

不登校傾向を示す者に対する、このような自然体験活動の効果を検証する際、比較的の不登校傾向の短いものに対する有効性が示されることが多い。本研究におけるソーシャルスキル改善に関しても、自己評価において改善が認められなかったことは、活動場面における他者との関わりを十分活用し、演習出来なかった可能性を示すことと考える。

3.2. 生きる力

第1回から6回までの全参加者のIKR簡易版の項

目に関して、各回の平均値と標準偏差を示した(表5.)。一元配置の分散分析用い、その値に関して検定を実施したが、有意な差は認められなかった。

しかし、Scheffeの方法による個別回の比較において、“心理的社会的能力”における「積極性」の項目に関して「6.37(1回目)と8.50(6回目)」との間に、「明朗性」の項目に関して「6.98(1回目)と9.25(6回目)」の間に、それぞれ有意な上昇が示された(p<.01)。また、「交友・協調」の項目に関しては、「5.95(1回目)と4.25(4回目)、7.67(5回目)、8.25(6回目)」との間に有意な上昇が示される結果であった(p<.1、P<.05、p<.01)。他にも、「視野・判断」の項目で「6.87(1回目)と8.08(6回目)」との間に、「適応行動」の項目で「6.84(1回目)と8.42(6回目)」の間にも、それぞれ有意な上昇が示された(p<.1、p<.05)。これら項目の合計点となる「心理的社会的能力合計」においても、「46.29(1回目)と58.67(6回目)」との間に有意な上昇が示される結果であった(p<.01)。次に、“徳育的能力”においては、「まじめ勤勉」の項目で「6.78(1回目)と8.33(6回目)」との間にのみ有意な上昇が示さ

れた。そして、“身体的能力”においては、「身体的耐性」の項目において、「6.97（1回目）と8.34（4回目）」との間に有意な上昇傾向が示された（ $p<.1$ ）。

これら結果が、IKR総合得点の「69.40（1回目）と113.33（6回目）」との間の有意な上昇につながったことが示される（ $p<.05$ ）。全14項目のうち半数の7項目において有意な上昇が示されたが、うち5項目が、“心理的社会的能力”に関する項目であった。元来、本質問紙の構成が心理的社会的能力に関わるものが多いものの、その割合以上に、ここでの変化項目が多かったことは、本事業が“心理的社会的能力”を向上させることに有効

であった結果を示すものとする。

次に、ソーシャルスキルと同様に、各参加者にとって“継続的に事業に参加することの効果”をより明確に示すために、その対象者にとって、“最初の事業参加時（First）と、最後の事業参加時（Final）”の数値を比較検討することとする。ここでの標本数は15名となり、項目ごとに平均値と標準偏差を示し、平均値の差の検定（t検定）を実施した結果を示す（表6.）。この時、“心理社会的能力”における「積極性」の項目のみ「6.60から8.20」と有意な上昇傾向が示される結果となった（ $p<.1$ ）。しかし、全ての項目において、数値的には上昇傾向が示されている。このこと

表5. IKR簡易版尺度事業別得点変化

分類	項目	項目数 (N)	第1回 M/(SD)	第4回 M/(SD)	第5回 M/(SD)	第6回 M/(SD)	F値 P	個別比較
心理的社会的能力	非依存	2 (59)	6.68 (2.34)	7.38 (2.12)	7.58 (1.75)	8.67 (1.70)	1.25 n.s.	n.s.
	積極性	2 (59)	6.37 (2.23)	7.53 (1.76)	7.41 (1.55)	8.50 (2.18)	1.60 n.s.	1回-6回**
	明朗性	2 (59)	6.98 (3.00)	8.09 (2.17)	8.00 (2.12)	9.25 (1.42)	1.30 n.s.	1回-6回*
	交友・協調	2 (59)	5.95 (2.24)	7.25 (1.98)	7.67 (1.32)	8.25 (1.53)	2.32 †	1回-4回†,1回-5回*,1回-6回**
	現実肯定	2 (59)	6.63 (2.32)	6.81 (2.40)	7.42 (2.02)	7.50 (2.43)	0.28 n.s.	n.s.
	視野・判断	2 (59)	6.87 (2.03)	6.59 (1.78)	7.50 (1.66)	8.08 (1.55)	1.02 n.s.	4回-6回†
	適応行動	2 (59)	6.84 (2.16)	8.19 1.73	8.08 1.44	8.42 2.40	1.17 n.s.	1回-6回*
	心理的社会的能力 合計	2 (59)	46.29 (13.50)	51.84 (11.04)	53.67 (9.10)	58.67 (10.08)	1.65 n.s.	1回-6回**
徳育的能力	自己規制	2 (59)	6.84 2.13	7.25 1.51	7.50 1.94	6.75 2.62	0.21 n.s.	n.s.
	自然への関心	2 (59)	8.00 (2.20)	7.56 (2.40)	6.75 (1.53)	7.83 (2.54)	0.45 n.s.	n.s.
	まじめ勤勉	2 (59)	6.78 (1.96)	7.50 (1.80)	7.58 (1.32)	8.33 (2.36)	0.89 n.s.	1回-6回*
	思いやり	2 (59)	8.16 1.46	7.84 1.62	7.92 1.89	8.25 1.36	0.11 n.s.	n.s.
	徳育的能力 合計	2 (59)	29.79 (5.42)	30.16 (5.15)	29.75 (4.28)	31.17 (7.70)	0.09 n.s.	n.s.
身体的能力	日常的行動力	2 (59)	6.23 (2.36)	6.84 (1.82)	7.25 (2.24)	7.25 (2.28)	0.41 n.s.	n.s.
	身体的耐性	2 (59)	6.97 (2.30)	8.34 (2.30)	7.67 (1.60)	8.33 (2.01)	0.85 n.s.	1回-4回†
	野外技術・生活	2 (59)	7.11 (2.10)	7.75 (2.17)	7.50 (1.66)	7.92 (1.80)	0.28 n.s.	n.s.
	身体的能力 合計	2 (59)	20.32 (5.70)	22.94 (5.27)	22.42 (4.65)	23.50 (5.06)	0.70 n.s.	n.s.
	IKR合計得点	2 (59)	96.40 (22.84)	104.94 (20.19)	105.83 (16.20)	113.33 (21.80)	0.92 n.s.	1回-6回*

**: $p<.01$,*: $p<.05$,†: $P<.1$

は、本事業に継続的に参加することが、生きる力の育成に有効に関わっていることを示すと考える。

実際、本事業に途中から参加できなくなった者の主たる理由は、「不登校状況の改善・変化」となっている。特に、中学3年生の参加者に関しては、卒業後の進学も考慮に入れ、自ら学校に通うようになるとの変化が多く認められた。

このことは、2008年度から本事業に参加していた生徒が、様々な悩みを抱えながらも、自ら高等学校への進学のため、中学校に登校することを決意し、そのことを他の参加者に伝えたことの具体的な事例の影響もあると十分考えられる。また、保護者から本事業後の日常生活における変化状況を調査した結果、「外出の機会が増えた」、「コミュニケーション量が増加した」、「家事手伝いを積極的にするようになった」、「家庭内で一定の学習時間を確保するようになった」、「リビングで家族と

ともに過ごす時間が増えた」等の、望ましい生活状況変化が生じていることが示された。

年間を通じて継続的に実施する、本事業の効果が調査用紙を用いた手法から、統計的には有意な変化が認めにくい状況であったと考えざるを得ないが、前述した様々な登校状況・生活状況の改善から、「数値化しにくい効果」を示したものと考える。

4. 結 語

2009年度継続的に全6事業を実施した、「ハートtoハートin GENKAI & YASU」の参加者及びその運営に関わったボランティアスタッフに対し、本事業の効果を測定するために、ソーシャルスキル及び生きる力に関する尺度を用い調査を行った。

その結果、ソーシャルスキルに関しては、事業ごとの比較において、回を重ねることで上昇傾向が示される結果が表れたが、統計的に有意な上昇とまでは言えないものであった。しかし、本事業によるソーシャルスキル育成の効果を示すものと考えた。一方で、“コミュニケーションスキル”の一つ捉えられる「聞く・話す」の項目に関しては、有意な下降傾向が示される結果であった。これは、各回におけるプログラム内容の影響、具体的には「他者との関わりを重視したものであるかどうか、そこでの討議場面設定の有無」が影響したとも言える。

また、ボランティアスタッフが評価した、参加者のソーシャルスキルに関しては、全体的に上昇傾向を示し、特に“集団行動”における「対人マナー」の項目、“仲間関係スキル”における「仲間関係の維持」「仲間への援助」の項目、そして“コミュニケーションスキル”における「聞く・話す」「話し合い」の項目に関しては、統計的に有意な上昇傾向を示すものであった。このボランティアスタッフの評価に関しては、事業全体を通じて同じスタッフが、同じ参加者を評価するものではないため、一様の評価基準によるものではない

表6. IKR簡易版尺度参加者にとっての“最初と最後”の比較

分類	項目	項目数 (N)	First M/(SD)	Final M/(SD)	t値 p
心理的 社会的 能力	非依存	2 (15)	7.33 (2.19)	8.20 (1.94)	1.15 n.s.
	積極性	2 (15)	6.60 (2.61)	8.20 (2.24)	1.95 ↑
	明朗性	2 (15)	7.40 (3.00)	8.93 (2.05)	1.64 n.s.
	交友・協調	2 (15)	6.60 (2.29)	8.00 (1.69)	1.90 n.s.
	現実肯定	2 (15)	6.73 (3.04)	7.47 (2.72)	0.70 n.s.
	視野・判断	2 (15)	6.43 (2.32)	7.67 (1.80)	1.63 n.s.
	適応行動	2 (15)	7.07 (2.60)	8.33 (2.35)	1.40 n.s.
	心理的社会的能力 合計	2 (15)	48.17 (15.60)	56.80 (11.76)	1.80 n.s.
徳育的 能力	自己規制	2 (15)	6.60 (2.17)	6.93 (2.52)	0.39 n.s.
	自然への関心	2 (15)	7.60 (2.26)	8.07 (2.66)	0.52 n.s.
	まじめ勤勉	2 (15)	7.27 (2.28)	7.93 (2.34)	0.79 n.s.
	思いやり	2 (15)	8.13 (1.85)	8.20 (1.47)	0.11 n.s.
	徳育的能力 合計	2 (15)	29.80 (6.22)	31.13 (7.61)	0.60 n.s.
身体的 能力	日常的行動力	2 (15)	6.10 (2.07)	7.00 (2.27)	1.14 n.s.
	身体的耐性	2 (15)	7.57 (2.60)	8.20 (2.37)	0.70 n.s.
	野外技術・生活	2 (15)	7.13 (2.00)	8.00 (1.93)	1.21 n.s.
	身体的能力 合計	2 (15)	20.80 (5.58)	23.20 (5.57)	1.18 n.s.
IKR合計得点	2 (15)	98.57 (26.52)	111.13 (23.66)	1.37 n.s.	

†P<.1

いが、全体的な上昇を示すことは、参加者が示した自己評価の結果よりも、ある意味、信頼できるものと捉えることもできると考える。

次に、生きる力に関する自己評価による調査結果からは、全体を通じ上昇傾向が示され、特に“心理的社会的能力”における「積極性」「明朗性」「交友・協調」「視野・判断」「適応能力」の項目、“徳育的能力”における「まじめ勤勉」の項目、そして“身体的能力”における「身体的耐性」の項目において、統計的に有意な上昇傾向が示される結果であった。このことは、今日の学校教育課題である生きる力育成に本事業が有効に作用したことを示すものであったと考える。

本事業は、小学4年生から中学3年生までを対象とした事業であり、中学3年生が9名と最も多くなっているものの、残り14名は中学2年生以下の者である。今回、事業参加後に示した「通学するようになる」との変化の多くは、中学3年生で見られた特徴であった。この変化の要因として、本事業への参加の影響があることは言うまでもない。残念ながら、数値変化による本事業の有効性を十分に証明することは困難であったといわざるを得ない。しかし、数値以上に参加者の行動に変化が現れたことは事実である。

何らかの事業を実施し、その有効性を検証するため、主に参加者が自身で回答する一種の「自己評価」によるアンケート調査を用いることが必要である。しかし、様々な課題を持つ本事業の対象者のような場合、この手法は、その事業を正確に捉えることができるのか、疑問を持たざるを得ない。「学校に通うことができない自分」を参加者は確実に認識しており、そのことは少年期に必要な確固とした「自己肯定感」を低下させていることは、容易に推測され、そのことが不登校者の特徴として自己肯定感の低さを呈している。そのため、自己評価が相対的に低くなり、アンケート調査によって示された数値自体が相対的に低くなる可能性もある。このことを背景とし、本調査における参加者とボランティアスタッフが示した結果の相違によって示されているものと考え。

今日的な社会課題を捉える際、義務教育期間における不登校状態を改善することだけが、目的ではないと考える。少子高齢化をその背景としながらも、その後の引きこもりを改善することも重要な課題であることは、言うまでもない¹¹⁾。13年間継続してきた本事業の参加者数は、残念ながら県の不登校者数から考えると、決して多い数であるとは言えない。しかし、参加者は毎回の事業における活動、他者との関わりを通じて確実な変化を示していることは、本事業の有効性を実態として捉えることができるものである。また、複数年この事業に参加して、高等学校へ進学した参加者が過去に多くいたことも事実である。

2009年度も、中学2年生以下の参加者が14名いた。本来的な本事業の役割から考えるならば、現段階での「学校に通うようになる」との変化を求める必要もあるが、多様化し複雑化する現在の不登校現象に関しては、短絡的にこのことを求めることは困難である。本事業は年間を通じ6回と、同様の他事業と比較すると、回数及び延べの実施期間も長いものであるといえるが、参加者の日常生活時間や人生全体の時間からすると、僅かであるといわざるを得ない。しかしながら、他者との関わりを遮断しがちな各参加者に対して、唯一の「集団教育の場」として機能している。

今後、年間を通じた事業数及び各事業における活動内容も含めたプログラミングの検証が、より本事業の有効性を高める上で必要なことである。事業期間は僅かであっても、その事業における経験の教育的影響力は、各参加者の生涯に及ぶ可能性が高いことを、再度認識しながら、次年度以降の本事業の在り方を検証する必要があるものと考え。

付記：本研究は、平成20年度～平成22年度福岡大学研究推進部領域別研究「野外教育プログラム研究」による研究であり、記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 文部科学省青少年意欲向上・自立支援事業の評価：
http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100103/019.htm. Accessed Feb 1, 2010
- 2) 築山泰典・藤井雅人：年間継続事業としての不登校キャンプの効果－ふりかえりとしての体験スピーチ会からの検討－、福岡大学スポーツ科学研究第40巻1号11-22、2009
- 3) 築山泰典：事業参加前後における生活習慣の変化から導く次年度事業への提言、9-13、「ハート to ハート in GENKAI 2008」報告書
- 4) http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/taiken.htm Accessed Feb 1, 2010
- 5) 橘直隆・平野吉直：生きる力を構成する指標、11-16、野外教育研究第4巻第2号、2001
- 6) 相川充・佐藤正二編：実践ソーシャルスキル教育（中学校）、図書文化、2008
- 7) 独立行政法人国立青少年教育進行機構IKR調査（簡易版）作成に関して
http://www.niye.go.jp/insreport_pdf/17gipu2.pdf. Accessed Feb 1, 2010
- 8) 大石英史：不登校の今日的傾向と「初発対応」の重要性、山口大学教育学部研究論叢第3部 芸術・体育・教育・心理第55巻、227-238、2005
- 9) 山川久恵・宮本正一：不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす影響、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要創刊号、65-72、2001
- 10) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/12/_icsFiles/afieldfile/2010/03/12/1288459_2.pdf Accessed May 1, 2010
- 11) 井出草平：引きこもりの社会学、41-44、世界思想社、2007

（平成22年11月6日受理）

